

多様化するペットとの同行避難はどこまで可能か

—東京都23区・神奈川県19市避難所における準備と受入動物種の調査—

The Possibility of Evacuating with Increasingly Diverse Pet Animals —A Survey on the Acceptance of Animal Breeds in Evacuation Centres in the 23 Wards of Tokyo and 19 Cities in Kanagawa Prefecture

新島 典子¹⁾・花木 優生²⁾

NIIJIMA Noriko

HANAKI Yu

要 約

日常で「家族」として扱われるペットは、非常時にも同行避難が推奨される。しかし、ペットとされる動物種は近年多様化し、災害時対応や準備にも多様性が求められることが懸念される。そこで、本論文では、多様化するペットとの同行避難に飼い主側と自治体側がどの程度備えられているかを明らかにするために、(1) 大学の動物看護学部生を対象に同行避難に向けた備蓄状況を調査した後、(2) 東京都23区と神奈川県19市の避難所でのペット受入準備状況や受入可能な動物種を自治体担当者に尋ねる調査票調査を実施した。(1)の結果、平時からの備蓄の必要性を認識しながらも行動に移せる人ばかりではなく、避難所の備蓄を頼らざるをえない現状が明らかになった。(2)の結果、23区でも19市でもすべての自治体では一部あるいはすべての避難所で同行避難を受け入れていたが、場所不足からフードやケージなどペット避難に必要な品を備蓄する自治体は23区中6区、19市中5市であった。飼育ルールを設ける自治体は19区、17市と多く、ペットの受け入れ頭数には「制限なし」とする自治体は20区、17市に上った。犬や猫、哺乳小動物はほぼ全ての、鳥類は大半の自治体で受入可能である一方で、いわゆるエキゾチックアニマルの中でも爬虫類、両生類、猛禽類、魚類、昆虫類などを受入可能な自治体は限定的であった。

キーワード：同行避難、動物種、エキゾチックアニマル、ペット

1 はじめに

(1) 背景と課題

犬や猫をはじめとする愛玩動物、いわゆるペットは、少子化や単身世帯化に伴い、日常では「家族」として扱われ〔山田, 2004〕、現在では非常時の「飼い主とペットの同行避難」(以下、同行避難)が推奨され

るに至っている〔環境省, 2018〕。過去の災害の中でも特に関西・淡路大震災(1995)以降、人だけでなくペットの被災も「社会問題」として認識された〔兵庫県南部地震動物救援本部活動の記録編集委員会, 1996〕。そして「被災動物の救護・管理」として被災者が落ち着くまで別の場所での「一時預かり」対応に始まり〔徳田, 2018〕、三宅島噴火災害による全島避難(2000年)以降に「飼い主とペットの同行避難」が目指されてきた〔加藤, 2013; 徳田, 2018 など〕。

同行避難については、先行研究からこれまでの対応

1) ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部

2) 自営業

経緯をまとめた研究[加藤, 2013]や、新潟中越での地震(2004年、2007年)後の状況[徳田, 2018]、東日本大震災(2013年)後の飼い主調査[梶原, 2019他]、熊本地震(2016年)後の同行避難や支援内容[加藤, 2017]など現地調査を元にした研究や、質問紙による意識調査[本村, 2022他]などさまざまな研究が進められてきた。そこでは、同行避難の普及の難しさ、それをもたらすペットイメージの両義性、普及の阻害要因や可能性などが論点とされてきた。他方で、ペットとして飼われる動物種は近年多様化し、哺乳類以外にも爬虫類やげっ歯類など多岐にわたる。しかし、先行研究は犬や猫が対象の調査[本村, 2022他]や論考[平井, 2017他]が主で、それ以外の動物種が可視化される機会は乏しかった。そこで、本論文では、多様化するペットとの同行避難について、飼い主側と自治体側が、実際にどの程度備えられているのかを明らかにする。

以下、第1章(2)から(5)では、同行避難を巡る背景や課題について整理する。

(2) 同行避難がスムーズに普及しないのはなぜか

日本で台風、豪雨、豪雪、洪水、土砂災害、地震、津波・高潮、火山噴火などによる災害が生じやすいのは、地形や位置、地質、気象などの自然的条件のためであり[内閣府, 2008]、多くの人々が被災している。直近の石川県能登半島地震(2024)では、地形その他の状況による救助の遅れや不足もみられるなど、被災者の救出や支援は必ずしも「公助」では足りず、「共助」や「自助」が求められる場合が少なくない。このような自然災害が起きやすい環境にあって、同行避難がスムーズに普及しにくいのはなぜだろうか。

「公助」や「共助」では資源も人手も限られることから、動物よりも人が優先される。それは、犬や猫などの愛玩動物が法律上では権利の客体としての「物」扱いされているからである。例えば、日本の航空会社ではペットは受託手荷物として引き受けられ、盲導犬や介助犬以外は専用クレートに入れて貨物室に載せられるケースが大半である。クレートを飼い主の隣に置く航空会社でも、緊急脱出時にはペットを機内に置いて逃げねばならない[スターフライヤー, 2024]。飼い主にとっては酷な規則の存在が、2024年1月羽田空港での爆発事故後に明らかになると、「そのような扱いは、動物愛護の観点から疑問」であるとか、「人間優先が至極当然」などと世論が割れた。つまり、非常

時のペットの扱いについては、さまざまな意見の人がいる。このように災害や喪失など非日常の問題状況に直面すると、平時には気付かなかった自分の持つペット観と他者の持つペット観との「ずれ」(＝リアリティ分離)[新島, 2001, 2004他]に気づく場面が増える。つまりペットの「両義性」が顕在化する[加藤, 2022]。すると「家族」であるはずのペットが「物」扱いされることに違和感を覚える人がいる一方で、他方ではペットを「人間」と同等に扱うことにモヤモヤする人も出てくるのである。

(3) 同行避難が出来ないと何が問題なのか

これに対し、同行避難が出来ないことは法律に背くことだと解釈される。ペット法学に詳しい弁護士の渋谷によれば、災害時に同行避難をして飼育動物の命を守るとは、飼い主の努力義務として法律や法令により課されている[弁護士ドットコムニュース, 2024]。渋谷の説明を、弁護士ドットコムニュース記事から以下に要約する。①まず、犬猫などの動物は単なる物質としての「物」ではなく「命あるもの」である。「命あるもの」という表現は、動物愛護管理法第2条の基本原則にも表され、法律上新たに認められた概念である。②その上で、同法第7条は、動物の所有者は「できる限り、当該動物がその命を終えるまで適切に飼養することに努めなければならない」と定め、飼い主の終生飼養を努力義務としている。③さらに、環境省による「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」第3共通基準の9の緊急時対策では、所有者等は「非常災害が発生したときは、速やかに家庭動物等を保護し(中略)避難する場合には、できるだけ同行避難(中略)に努めること」と定め、緊急避難時の同行避難を努力義務としている。「これらの法令を踏まえれば、飼い主には、災害などの緊急時においては、同行避難をし、飼育している動物の命を守るという努力義務が課されている」といえる[弁護士ドットコムニュース, 2024]。

環境省も過去の震災対応経緯を踏まえ、2013年に災害時のペット同行避難を奨励する「災害時におけるペットの救護対策ガイドライン(平成25年6月策定)」を策定した。対象は「家庭動物等のうち主に犬及び猫などのペット」と明記されている。ここでいう「家庭動物」とは「愛がん動物または伴侶動物(コンパニオンアニマル)」として家庭等で飼養及び保管されている

動物並びに情操の滋養および生態観察のため飼養および保管されている動物」をさし、「動物」とは「哺乳類、鳥類及び爬虫類に属する動物」と定義されている〔環境省, 2002告示, 2022最終告示〕。そのため、家庭で飼育する哺乳類・鳥類・爬虫類であれば、犬猫以外の動物種も救護対策の対象に含まれることになる。

なお、動物愛護管理法に基づけば、これらの哺乳類・鳥類・爬虫類を衰弱させ、または死亡させれば同法の罰則対象になる。「すなわち、救うことができなかったということはあり得るが、救うことができる＝連れ出せたにもかかわらず置き去りにすれば、法律に違反する」ことになる〔アニマルライツセンター, 2017〕。

(4) 同行避難の阻害要因はなにか

とはいえ、環境省のガイドライン自体には法的強制力はない。災害対策や避難所での受入方針は各自治体が策定し、検討中の自治体もある。例えば、東日本大震災後の仙台市では、同行避難を受け入れるかどうかは避難所ごとに異なる判断であったという〔梶原, 2019〕。避難所でペット同行不可となる理由には、管理しきれないペットの鳴き声による騒音、悪臭やトイレケアなどの衛生管理、動物アレルギー体質の人への迷惑、人獣共通感染症の蔓延の恐れなど様々なものが考えられる。さらに、飼い主側の問題もある。災害でパニック状態となったペットを安全にクレートにに入れて同行避難を行うことは飼い主でも容易なことではない。普段からケージやクレートに苦手意識を持つ犬や猫はなおさら避難が困難になる。同行避難可能な避難所においても、他の避難者への深慮が不可欠となることから、避難所には行かずペットと一緒に傾いた自宅に残る飼い主や、建物に入らずペットと車中で過ごす飼い主もいる。しかし、避難しないと余震などによる二次被害を受けたり、エコノミークラス症候群を発症するリスクがある。

(5) 同行避難はどこまで可能なのか

では、同行避難は実際にはどこまで可能なのだろうか。近年では、犬猫に限らず多様な動物種を飼育する人が増えている。そのような多様な動物種については災害時の処遇はどこまで可能で、実際にはどうなるだろうか。犬や猫には動物病院に出掛ける習慣や経験があるが、それ以外の動物種の多くはずっと自宅で過ごすため、災害時に落ち着いて同行避難が出来るのか、

受け入れ先があるのかが懸念される。

以上、(1) から (5) に鑑みれば、犬や猫、それ以外の動物種も含めて安全に同行避難を行える避難所がどこにどの程度設けられ、何頭まで、どのような動物種が同行避難できるのかについて、すべての飼い主が平時より知識を持ち、検討しておくべきことが分かる。

そこで、本研究ではまず、①大学の動物看護学部生を対象に同行避難に向けた備蓄状況や同行避難可能な避難所についての知識を調べた後、②東京都 23 区と神奈川県 19 市の自治体担当者の協力を得て、避難所でのペット受入準備状況や受入可能な動物種を調査した。

2 同行避難の準備と意識： 動物看護学部生への調査票調査

(1) 調査方法と対象

第 2 章では、動物看護学部 に所属する大学生を対象に同行避難に向けた備蓄状況や同行避難可能な避難所の知識について実施した調査結果をまとめた。調査方法は、2022 年 10 月から 12 月にかけて調査票調査を実施した。調査対象は、スノーボールサンプリングで協力を取り付けた東京都内の大学の動物看護学部 1 ～ 4 年生の男女 190 名 (女性:163 名、男性:26 名、回答なし:1 名) で、調査方法は Microsoft forms を用いた調査票調査である。途中でいつでも回答を止められることを話したうえ、回答するかどうかは自由意思に任せ、無記名回答として実施した。

(2) 調査結果

① 災害時には「ペットとの同行避難」が原則であることは知っているか (図 2-1)

災害時には「ペットとの同行避難」が原則であることは知っているかと尋ねたところ、「知っている」が 186 名 (97.9%)、「知らない」が 4 名 (2.1%) と回答した。以上から、災害時に実際に同行避難を実施できるかどうかは別として、ほとんどの学生はペットと同行避難するのが原則であることを知っていた。調査対象学生は動物看護学部 に所属して動物関連科目を履修していること、また、日本における自然災害の発生件数が近年増していることから、ニュースなどのメディアから「同行避難」という単語を知った人も多いことが考えられる。

災害時には「ペットとの同行避難」が原則であることは知っていたか

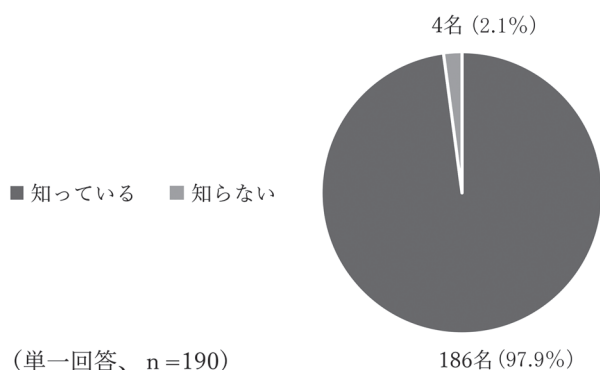


図 2-1 災害時には「ペットとの同行避難」が原則であることは知っているか

災害時避難所がどこにあるか把握しているか

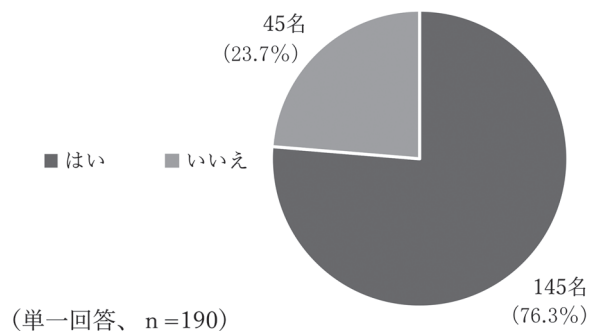


図 2-2 自宅最寄りの災害時避難場所を把握しているか

現在ペットを飼っているか（実家も含む）

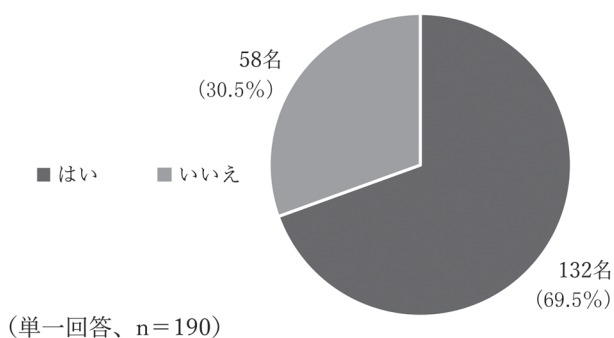


図 2-3 現在ペットを飼っているか（実家での飼育も含む）

② 自宅最寄りの災害時避難場所がどこにあるか把握しているか(図 2-2)

続いて、自宅最寄りの災害時避難場所がどこにあるかを把握しているか尋ねたところ、「はい」が145名(76.3%)、「いいえ」が45名(23.7%)という回答であった。

③ 現在ペットを飼っているか（実家での飼育も含む）(図 2-3)

次に、現在ペットを飼っているか（実家での飼育も含む）尋ねたところ、「はい」が132名(69.5%)、「いいえ」が58名(30.5%)という結果になった。

④ 飼っているペットの種類(図 2-4)

続いて、飼っているペットの種類を尋ねたところ、

飼っているペットの種類

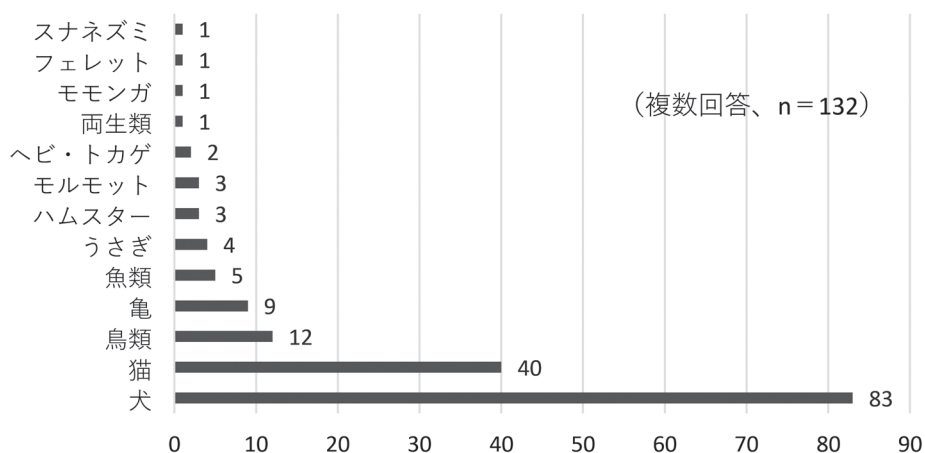


図 2-4 飼っているペットの種類（複数回答可）

「犬」(83名)が最も多く、次に「猫」(40名)、「鳥類」(12名)と続く。犬猫以外のいわゆるエキゾチックアニマル(42匹)も多く、実際に飼われているペットの種類は多種にわたることが明らかとなった。

⑤ ペットの受け入れが可能な最寄りの避難場所は把握しているか(図2-5)

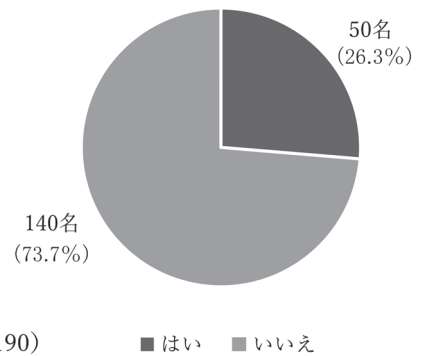
次に、ペットの受け入れが可能な最寄りの避難場所は把握しているか尋ねたところ、「はい」が50名(26.3%)、「いいえ」が140名(73.7%)で全体の7割強が把握していないという結果になった。

⑥ ペットを飼っているが避難場所で受け入れを断られた場合の対処法(図2-6)

続いて、ペットを飼っているが避難場所で受け入れを断られた場合の対処法を尋ねたところ、「別の場所を探す」が87名(45.8%)、「自宅待機」が28名(14.7%)、「車中泊」が25名(13.2%)、「避難所の外で一緒に過ごす」「交渉する」がいずれも13名(6.8%)、「家に置いていく」が7名(3.7%)、「避難所の外に置く」が6名(3.2%)、「親戚など引き取り手を探す」が5名(2.6%)、「動物病院などに預ける」が2名(1.1%)、「放し飼いにする」「何か方法を探す」「車の中で飼養する」「協力して避難所を作る」が各1名(0.5%)という結果になった。

「家に置いていく」と回答した人(7名)もいたが、災害時には津波や火災、液状化現象などの二次被害が起り得る危険性があるため「家に置いていく」ことは推奨されていない。自分の住む地域が災害危険区域に指定されてしまった場合には、家に置いていった

ペットの受け入れが可能な最寄りの
避難場所は把握しているか



(単一回答、n=190)

■ はい ■ いいえ

図2-5 ペットの受け入れが可能な最寄りの避難場所は把握しているか

ペットを避難所に連れて帰ることすら難しくなるからである。

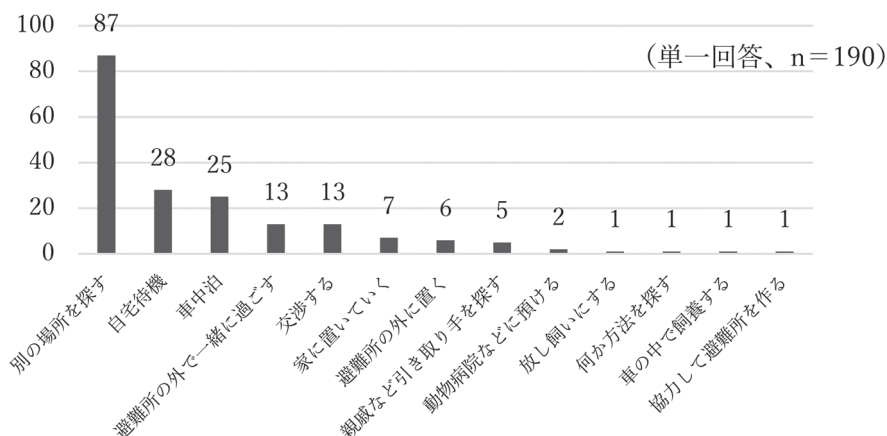
実際に、東日本大震災時の福島県各場所では、原発事故の影響で災害危険区域に指定され避難所から家に返ることができず、家に置いていったペットが多数餓死したとも聞いている。

⑦ 災害時用に既に備蓄しているペット用品
(表2-1)

次に、災害時用に既に備蓄済のペット用品を尋ねたところ、「フード」(72名)が最も多く、「水」(43名)や「トイレシート類」(39名)も多くみられた。

しかし、図2-4での猫の飼育人数(40名)と表2-1の「猫砂」の備蓄数(4名)を比べると、「猫砂」を備えて

ペットを飼っているが避難場所で
受け入れを断られた場合の対処法



(単一回答、n=190)

図2-6 ペットを飼っているが避難場所で受け入れを断られた場合の対処法

いる人は猫飼い主の1割しかおらず、極めて少ない。しかも、猫の糞尿は特に臭いが強いいため、同行避難するに際して「猫砂」の不足は避難所でのトラブルを起こしかねないことが懸念される。飼い主による備蓄数も少なく持ち運ぶには重い「猫砂」は、避難所側で多めに備蓄することにより、ペットのトイレ問題トラブルをある程度は抑えられるのではないだろうか。

⑧ 災害時に向けて備蓄しておくべきペット用品

(表 2-2)

最後に、災害時に備蓄しておくべきだと思うペット用品を尋ねたところ、「フード」と回答したのが181名と回答者全体の9割以上を占めていた。次に「水」が142名、「トイレシート含むトイレ用品」が124名、「リード」が83名と続いた。

表 2-1 既に備蓄済みのペット用品

備蓄済みのペット用品	回答者数
フード	72
備蓄なし	54
水	43
トイレシート含むトイレ用品	39
リード	17
クレート	15
ゴミ袋	11
おやつ	10
おもちゃ	8
ケージ	8
ウェットティッシュ	8
首輪	7
タオル	7
毛布	7
皿	6
薬	5
猫砂	4
ペット用おむつ	2
ガムテープ	2
ティッシュ類	2
ワクチン接種証明書	2
迷子札	1
水槽	1
虫かご	1
充電器	1
防寒グッズ	1
掃除用品	1
ペットボトル	1

表 2-1 と比べるとほとんどの備蓄品が倍近く増えていることから、災害対策としての備蓄意識はあるものの、なかなかそれを実際の行動に移せない人が多いこ

表 2-2 備蓄しておくべきペット用品

備蓄が必要と考えるペット用品	回答者数
フード	181
水	142
トイレシート含むトイレ用品	124
リード	83
クレート	48
おもちゃ	45
毛布	33
首輪	31
タオル	28
ケージ	26
おやつ	24
皿	24
ペット用洋服	21
ゴミ袋	19
ペット用靴	17
薬	15
ウェットティッシュ	11
ペット用おむつ	9
ブラシ	7
猫砂	6
ガムテープ	6
ティッシュ類	6
防寒グッズ	5
新聞紙	5
ワクチン接種証明書	5
ペットの写真	5
迷子札	3
鑑札	3
クッション	3
ケア用品	3
ペットボトル	2
消臭スプレー	2
飼い主の緊急連絡先	2
ペット手帳	2
ペット用レインコート	1
段ボール	1
厚手シート	1
カーペットローラー	1
箱	1
小型扇風機	1
マナーウェア	1

とが分かる。では実際に有事の際には、避難所にはどの程度頼れるものだろうか。

3 東京都 23 区の避難所情報

(1) 調査方法と対象

第3章では、東京都 23 区の避難所情報の調査結果をまとめた。2022 年 11 月から 2023 年 1 月にかけて、東京都 23 区の区役所の避難情報の担当部署に Microsoft forms による調査票調査の依頼メールを送り、①同行避難とペットが過ごせる場所について、②避難所でのペットの飼育ルールについて、③ペット用備蓄品について、④ペットの災害対策パンフレットについて、⑤避難所に連れていけるペット数の制限と種類についての回答を得た。23 区に送り、23 区全ての担当者より回答を得た (n=23)。回答内容を以下の表 3-1 から 3-6 にまとめた。

(2) 調査結果

① 同行避難とペットが過ごせる場所 (表 3-1)

ペットを連れて避難してきた住民を受け入れ可能か尋ねたところ、ほとんどの区が「すべての避難所で受け入れ可能」と回答した。一方で、板橋区と中央区は「指定の避難所のみ受け入れ可能」と回答した。

次に、避難所に連れてきたペットはどこで過ごせるか尋ねたところ、「屋外」と回答した自治体 (14 区) が多く見受けられた。「ペット専用室」を備える自治体 (9 区) も多かったが、「屋外」と併記されている区 (7 区) が大半を占め、「ペット専用室」に確実に入れそうなのは葛飾区のみ、「ペット専用スペース」で過ごせるのは文京区のみであった。ペットとの「室内同居」ができると答えた区は無く、「避難の状況に応じて同居・ペット別での避難を検討する」という豊島区にその可能性があるのみで、同居避難が最初からできる区はなかった。

表 3-1 東京都 23 区 同行避難とペットが過ごせる場所

	避難所に同行避難は可能か	避難所では「どこで」過ごせるか
足立区	全ての避難所で受け入れ可能	屋外
荒川区	全ての避難所で受け入れ可能	非公開
板橋区	指定の避難所で受け入れ可能	人のスペースから離れた雨風当たらないスペース
江戸川区	全ての避難所で受け入れ可能	屋外、水害時は屋内
大田区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外
葛飾区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室
北区	全ての避難所で受け入れ可能	昇降口
江東区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外
品川区	風水害では原則区が運営し全てで受け入れ可能 震災では避難所ごとに異なる	ペット専用室、屋外
渋谷区	飼育場所を確保できる避難所に受け入れ可能	屋外、一部屋内
新宿区	全ての避難所で受け入れ可能	避難場所により異なる
杉並区	全ての避難所で受け入れ可能	避難場所により異なる
墨田区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外
世田谷区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外
台東区	全ての避難所で受け入れ可能	避難場所により異なる
千代田区	全ての避難所で受け入れ可能	屋外
中央区	指定の避難所で受け入れ可能	屋外
豊島区	全ての避難所で受け入れ可能	避難の状況に応じて、同居・ペット別での避難を検討する
中野区	全ての避難所で受け入れ可能	屋外
練馬区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外
文京区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用スペース
港区	全ての避難所で受け入れ可能	屋外
目黒区	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外

なお、基本的にはペットは「屋外」で過ごすことになるが、水害時のみは室内にペット専用スペースを設ける区や、人のスペースから離れた場所にペットエリアを設ける区もあった。

② 避難所でのペットの飼育ルール (表 3-2)

避難所でのペットの飼育ルールはあるか尋ねたところ、「飼育ルールあり」が19区、「飼育ルールなし」が3区であった。また、「飼育ルールあり」と回答した区の中でも、「冊子あり」が10区、「冊子なし」が9区となった。加えて、大田区は冊子ではなく大田区ホームページに飼育ルールを載せているとのことだった。

次に、「飼育ルールなし」と回答した3区は、全て「ルール作成中」であり、「今後ルールを作成する予定はない」と回答した区はなかった。

③ ペット用備蓄品 (表 3-3)

ペット用備蓄品について尋ねたところ、「備蓄なし、今後も準備する予定なし」が13区、「備蓄なし、今後準備する予定ありまたは検討中」が3区、「備蓄あり」が6区という結果になった。

備蓄されているペット用品の種類は「フード」、「ケージ」、「リード」などが多く見受けられ、港区のみ「トイレシート」が備蓄されている。また、備蓄されていない区での備蓄品の問題点としては、「フード」や「ケージ」などを置くスペースが無く、備蓄品の話は進められないとのことであった。基本的には、飼い主が持参するルールがどこの区にもあるため、同行避難の際は備蓄品の準備は最低限行って避難すべきであることが分かった。

以上をまとめると、飼い主側では備蓄不足になりがちなアイテムであっても、自治体で十分に備蓄されているわけではないことが分かった。つまり、災害時には高い確率で必須アイテムが不足しかねない現状が明らかになった。

④ ペットの災害対策パンフレット (表 3-4)

ペットの災害対策パンフレットについて尋ねたところ、「区独自のパンフレットを配布している区」が16区、「配布していない区」が7区という結果になった。

配布先は「ホームページ」や各区「保健所」が多く見受けられ、「ホームページ」ではいつでも見返せるものとなっている。また、江戸川区では「ペットショップ」でも配布しており、今後どの区もペットを迎えると同時に、ペットショップから飼い主へ災害対

表 3-2 東京都 23 区 避難所でのペットの飼育ルール

	避難所でのペットの飼育ルールについて	現状
足立区	飼育ルールあり	冊子なし
荒川区	非公開	非公開
板橋区	飼育ルールあり	冊子作成中
江戸川区	飼育ルールあり	冊子なし
大田区	飼育ルールあり	ホームページに公開
葛飾区	飼育ルールあり	冊子あり
北区	飼育ルールなし	ルール作成中
江東区	飼育ルールあり	冊子なし
品川区	飼育ルールなし	ルール作成中
渋谷区	飼育ルールあり	冊子あり
新宿区	飼育ルールあり	冊子あり
杉並区	飼育ルールあり	冊子あり
墨田区	飼育ルールあり	冊子なし
世田谷区	飼育ルールあり	冊子あり
台東区	飼育ルールあり	冊子なし
千代田区	飼育ルールあり	冊子あり
中央区	飼育ルールあり	冊子あり
豊島区	飼育ルールなし	ルール作成中
中野区	飼育ルールあり	冊子あり
練馬区	飼育ルールあり	冊子なし
文京区	飼育ルールあり	冊子なし
港区	飼育ルールあり	冊子あり
目黒区	飼育ルールあり	冊子あり

策のパンフレットやリーフレットを配布すれば、同行避難に対しての意識や認知が高まるのではないかと考えているとのことであった。

⑤ 避難所に連れていけるペット数の制限と種類 (表 3-5)

避難所に連れていけるペット数の制限について尋ねたところ、「制限なし」が19区、「制限あり」が1区、「明確な取り決めは無い」が1区、「各避難所の収容数による」が1区という結果になった。「制限あり」の新宿区では、収容数の関係上、1世帯につき1～2匹ほどという頭数制限があった。多頭飼育を行っている飼い主は、エリアによってこのように受け入れ頭数が異なることを知識として有しておくべきだろう。

次に、連れていけるペットの種類について尋ねたところ、区により回答は様々であり、「犬や猫」、「哺乳小動物」といった一般的なペットのみ受け入れている区のみならず、「爬虫類」や「両生類」、「猛禽類」な

表 3-3 東京都 23 区 ペット用備蓄品

	ペット用備蓄品の準備について	備蓄品の種類
足立区	備蓄なし（今後準備する予定ありまたは検討中）	
荒川区	非公開	
板橋区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
江戸川区	備蓄なし（今後準備する予定ありまたは検討中）	
大田区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
葛飾区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
北区	備蓄あり	フード、ケージ
江東区	備蓄あり	ケージ、リード
品川区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
渋谷区	備蓄あり	フード、ケージ、テント
新宿区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
杉並区	備蓄なし（今後準備する予定ありまたは検討中）	
墨田区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
世田谷区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
台東区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
千代田区	備蓄あり	フード、リード、テント、首輪、鑑札、迷子札
中央区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
豊島区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
中野区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
練馬区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
文京区	備蓄あり	ケージ
港区	備蓄あり	フード、ケージ、トイレシート、リード、食器、首輪
目黒区	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	

表 3-4 東京都 23 区 ペットの災害対策パンフレット

	ペットの災害対策パンフレットについて	パンフレットの配布先
足立区	配布している	動物病院、足立区保健所
荒川区	配布していない	
板橋区	パンフレット作成中、ペット防災動画はあり	YouTube「板橋区公式チャンネル」で公開中
江戸川区	配布している	動物病院、健康サポートセンター、ペットショップなど
大田区	配布している	ホームページに掲載
葛飾区	配布している	葛飾区保健所（健康プラザかつしか）
北区	配布していない	
江東区	配布している	防災課、江東区保健所、防災訓練で配布
品川区	配布していない	
渋谷区	配布している	ホームページに掲載
新宿区	配布している	新宿区保健所
杉並区	配布している	杉並区保健所
墨田区	配布している	庁舎、ホームページに掲載
世田谷区	配布している	災害対策課、ホームページに掲載
台東区	配布していない	
千代田区	配布している	ホームページに掲載
中央区	配布している	区役所窓口、イベント
豊島区	配布していない	
中野区	配布している	ホームページに掲載
練馬区	配布している	区役所生活衛生課、イベント
文京区	配布していない	
港区	配布している	港区保健所
目黒区	配布している	目黒区保健所、生活衛生課

表 3-5 東京都 23 区 避難所に連れていけるペット数の制限と種類

	避難所に連れていける ペット数の制限	避難所に連れていけるペットの種類
足立区	制限なし	明確な取り決めはない
荒川区	非公開	非公開
板橋区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、両生類、魚類、昆虫類、哺乳小動物
江戸川区	制限なし	小～大型犬、猫、哺乳小動物
大田区	各避難所の収容数による	小～大型犬、猫、哺乳小動物
葛飾区	制限なし	ケージに収まる飼育動物
北区	制限なし	明確な取り決めはない
江東区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物
品川区	制限なし	小～大型犬、猫、哺乳小動物
渋谷区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、哺乳小動物
新宿区	1～2 程	小～大型犬、猫、鳥類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物
杉並区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物 毒性や人に危害を与える動物は不可
墨田区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物
世田谷区	制限なし	小～大型犬、猫、哺乳小動物
台東区	制限なし	明確な取り決めはないが、人に危害を与える動物は不可
千代田区	制限なし	小～大型犬、猫、哺乳小動物
中央区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、両生類、昆虫類、哺乳小動物 毒性や人に危害を与える動物、ケージに入らないサイズの動物は不可
豊島区	制限なし	明確な取り決めはない
中野区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、哺乳小動物、 飼い主本人が飼養できるのであれば他も可
練馬区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、哺乳小動物 人に危害を与える動物は不可
文京区	明確な取り決めはない	明確な取り決めはない
港区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物
目黒区	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、哺乳小動物

どエキゾチックな動物種を受け入れてくれる区もあった。中でも江東区、杉並区、墨田区では、調査の結果、幅広い動物種を受け入れてくれることが分かった。

また、中野区は原則「犬、猫」、「鳥類」、「哺乳小動物」を受け入れるが、飼い主本人が責任をもって設備の整った飼養ができるのであれば、「上記の動物以外」も受け入れ対応を行うとのことだった。

なお、「爬虫類」や「魚類」の受け入れが出来ない区の理由としては、「体温調整、温水調整のためにコンセントが必要になる」などの場合には受け入れが難しいためとの回答があった。

⑥ 東京都 23 区ホームページ (表 3-6)

なお、東京都 23 区のウェブページ URL を以下のリストにまとめた。自分に関わりのある自治体については平時から調べ、備えておきたい。

4 神奈川県 19 市の避難情報

(1) 調査方法と対象

第 4 章では、神奈川県 19 市の避難情報の調査結果をまとめた。2022 年 11 月から 2023 年 1 月にかけて、神奈川県 19 市の市役所の避難情報の担当部署に宛てて、Microsoft forms による調査票調査の依頼メールを送り、①同行避難とペットが過ごせる場所について、②避難所でのペットの飼育ルールについて、③ペット用備蓄品について、④ペットの災害対策パンフレットについて、⑤避難所に連れていけるペット数の制限と種類についての回答を得た。19 市に送り、19 市全てから回答を得た。回答内容を以下の表 4-1 から 4-6 にまとめた。

表 3-6 東京都 23 区 ホームページ

足立区	https://www.city.adachi.tokyo.jp/index.html
荒川区	https://www.city.arakawa.tokyo.jp/
板橋区	https://www.city.itabashi.tokyo.jp/?hl=ja
江戸川区	https://www.city.edogawa.tokyo.jp/?hl=ja
大田区	https://www.city.ota.tokyo.jp/
葛飾区	https://www.city.katsushika.lg.jp/?hl=ja
北区	https://www.city.kita.tokyo.jp/
江東区	https://www.city.koto.lg.jp/
品川区	https://www.city.shinagawa.tokyo.jp/
渋谷区	https://www.city.shibuya.tokyo.jp/
新宿区	https://www.city.shinjuku.lg.jp/
杉並区	https://www.city.suginami.tokyo.jp/
墨田区	https://www.city.sumida.lg.jp/
世田谷区	https://www.city.setagaya.lg.jp/
台東区	https://www.city.taito.lg.jp/
千代田区	https://www.city.chiyoda.lg.jp/
中央区	https://www.city.chuo.lg.jp/
豊島区	https://www.city.toshima.lg.jp/
中野区	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/
練馬区	https://www.city.nerima.tokyo.jp/
文京区	https://www.city.bunkyo.lg.jp/
港区	https://www.city.minato.tokyo.jp/
目黒区	https://www.city.meguro.tokyo.jp/smph/index.html

(2) 調査結果

① 同行避難とペットが過ごせる場所について(表 4-1)

ペットを連れて避難してきた住民を受け入れ可能か尋ねたところ、「全ての避難所で受け入れ可能」が11市、「指定の避難所で受け入れ可能」が5市という結果になった。

藤沢市と横須賀市は「震災時」と「風水害時」とで受け入れが異なる。また、座間市では「震災時」のみペットを受け入れるとのことだった。

次に、避難所に連れてきたペットはどこで過ごせるか尋ねたところ、「屋外」が多く見受けられ、「室内同居」ができる市は無かった。

② 避難所でのペットの飼育ルールについて(表 4-2)

避難所でのペットの飼育ルールはあるか尋ねたところ、「飼育ルールあり」が17市、「飼育ルールなし」が2市であった。また、「飼育ルールあり」と回答した市の中でも、「冊子あり」が14市、「冊子なし」が2市となり、加えて、南足柄市は「冊子作成予定中」とのことだった。

次に「飼育ルールなし」と回答した2市はどちらも「ルール作成検討中」であり、「今後ルールを作成する

表 4-1 神奈川県 19 市 同行避難とペットが過ごせる場所

	避難所に同行避難は可能か	避難所では「どこで」過ごせるか
厚木市	指定の避難所で受け入れ可能	屋外、車内、各避難所が指定した場所
綾瀬市	指定の避難所で受け入れ可能	ペット専用スペース
伊勢原市	全ての避難所で受け入れ可能	屋外
海老名市	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外
小田原市	指定の避難所で受け入れ可能	屋外、車内、風水害時のみ屋内
鎌倉市	全ての避難所で受け入れ可能	避難所により異なるが、基本屋外
川崎市	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用スペース
相模原市	全ての避難所で受け入れ可能	屋外
座間市	震災時のみ受け入れ可能	避難所により異なる
逗子市	指定の避難所で受け入れ可能	ペット専用室、屋外
茅ヶ崎市	指定の避難所で受け入れ可能	避難所により異なる
秦野市	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用スペース
平塚市	全ての避難所で受け入れ可能	避難所により異なる
藤沢市	震災時は全ての避難所 風水害時は指定の避難所	避難所により異なる
三浦市	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用スペース
南足柄市	全ての避難所で受け入れ可能	避難所やペットの種類により異なる
大和市	全ての避難所で受け入れ可能	屋外
横須賀市	震災時は全ての避難所 風水害時は指定の避難所	ペット専用室、屋外
横浜市	全ての避難所で受け入れ可能	ペット専用スペース

表 4-2 神奈川県 19 市 避難所でのペットの飼育ルール

	避難所でのペットの飼育ルールについて	現状
厚木市	飼育ルールあり	冊子あり
綾瀬市	飼育ルールなし	検討中
伊勢原市	飼育ルールあり	冊子あり
海老名市	飼育ルールあり	冊子あり
小田原市	飼育ルールあり	冊子なし
鎌倉市	飼育ルールなし	検討中
川崎市	飼育ルールあり	冊子あり
相模原市	飼育ルールあり	冊子あり
座間市	飼育ルールあり	冊子あり
逗子市	飼育ルールあり	冊子なし
茅ヶ崎市	飼育ルールあり	冊子あり
秦野市	飼育ルールあり	冊子あり
平塚市	飼育ルールあり	冊子あり
藤沢市	飼育ルールあり	冊子あり
三浦市	飼育ルールあり	冊子あり
南足柄市	飼育ルールあり	冊子作成予定中
大和市	飼育ルールあり	冊子あり
横須賀市	飼育ルールあり	冊子あり
横浜市	飼育ルールあり	冊子あり

予定はない」と回答した市はなかった。

③ ペット用備蓄品について (表 4-3)

ペット用備蓄品について尋ねたところ、「備蓄なし、今後も準備する予定なし」が12市、「備蓄なし、今後準備する予定ありまたは検討中」が2市、「備蓄あり」が5市であった。

備蓄されているペット用品の種類は「ケージ」、「クレート」、「医療品」、「医療器具」に限られていた。東京都とは異なり、「フード」の備蓄が全くないことが分かった。また、厚木市にのみ、東京都や他の市には見られない「医療品」や「医療器具」が備蓄されていた。

以上をまとめると、飼い主側で備蓄不足になりがちなアイテムだけに限らず、ほぼ全ての必要備蓄品について自治体では備蓄されておらず、頼れるわけではないことが分かった。つまり、災害時には高い確率で必須アイテムが不足しそうな現状であった。

④ ペットの災害対策パンフレットについて (表 4-4)

ペットの災害対策パンフレットについて尋ねたところ、「市独自のパンフレットを配布」している市が14市、「配布していない」市が5市という結果になった。

表 4-3 神奈川県 19 市 ペット用備蓄品

	ペット用備蓄品の準備について	備蓄品の種類
厚木市	備蓄あり	ケージ、医薬品、医療器具
綾瀬市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
伊勢原市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
海老名市	備蓄なし（今後準備する予定ありまたは検討中）	
小田原市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
鎌倉市	備蓄なし（今後準備する予定ありまたは検討中）	
川崎市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
相模原市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
座間市	備蓄あり	ケージ
逗子市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
茅ヶ崎市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
秦野市	備蓄あり	ケージ、クレート
平塚市	備蓄あり	ケージ
藤沢市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
三浦市	備蓄あり	ケージ
南足柄市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
大和市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
横須賀市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	
横浜市	備蓄なし（今後も準備する予定なし）	

表 4-4 神奈川県 19 市 ペットの災害対策パンフレット

	ペットの災害対策 パンフレットについて	パンフレットの配布先
厚木市	配布している	市生活環境課窓口、公民館、動物病院、 ホームページに掲載
綾瀬市	配布していない	
伊勢原市	配布していない	
海老名市	配布している	ホームページに掲載
小田原市	配布している	ホームページに掲載
鎌倉市	配布していない	
川崎市	配布している	ホームページに掲載
相模原市	配布している	ホームページに掲載
座間市	配布していない	
逗子市	配布している	ホームページに掲載、広報誌で案内
茅ヶ崎市	配布している	茅ヶ崎市保健所衛生課窓口
秦野市	配布している	市役所窓口
平塚市	配布している	市役所環境保全衛生課窓口
藤沢市	配布している	市役所窓口等
三浦市	配布していない	
南足柄市	配布している	ホームページに掲載、環境課窓口
大和市	配布している	市の狂犬病予防集合接種会場など
横須賀市	配布している	横須賀市動物愛護センター
横浜市	配布している	愛護センター、ホームページに掲載、 区役所生活衛生課窓口

配布先は「ホームページ」や「各市役所窓口」が多く見受けられ、こちらも東京都同様「ホームページ」ではいつでも見返せるものとなっている。また、大和市では「狂犬病予防集合注射会場」でパンフレットを配布しており、他の市区とは違った取り組みを行っている。

⑤ 避難所に連れていけるペット数の制限と種類について(表 4-5)

避難所に連れていけるペット数の制限を尋ねたところ、「制限なし」が17市、「各避難所の収容数による」が1市、「各避難所の状況による」が1市という結果になった。

次に、連れていけるペットの種類について尋ねたところ、こちらも東京都同様で市により回答は様々であり、「犬や猫」、「哺乳小動物」といった一般的なペットのみ受け入れる市から「爬虫類」や「両生類」、「猛禽類」など多様な動物種を受け入れている市もあった。中でも、相模原市、逗子市、茅ヶ崎市、藤沢市、横須賀市では、幅広い動物種を受け入れていることが分かった。

また、昆虫類でも「嫌悪感のある虫」や、親しみ深い虫でも「ケースに沢山収容されているもの」は、「見た目の問題上から」受け入れを断る場合があるというコメントも頂いた。

⑥ 神奈川県 19市のホームページ(表 4-6)

なお、神奈川県 19市のウェブページURLを以下のリストにまとめた。自分に関わりのある自治体の状況は平時から調べておきたい。

5 考察

本研究では、まず自然災害時のペット同行避難の意識に関する調査票調査を、大学生を対象に実施し、その結果を第2章に示した。次に、東京都23区と神奈川県 19市の役所にも同行避難等の調査票調査への回答を依頼し、各自治体における現状の備えや災害に対する課題について第3章と第4章に回答をまとめた(2022年11月から2023年1月まで時点での回答であり、それ以降の変更改訂は反映されていない)。

その結果、動物看護学部の大学生であっても、備

表 4-5 神奈川県 19 市 避難所に連れていけるペット数の制限と種類

	避難所に連れていける ペット数の制限	避難所に連れていけるペットの種類
厚木市	各避難所の状況による	小～大型犬、猫、鳥類、哺乳小動物 各避難所の状況により異なる
綾瀬市	制限なし	ケージに収まる飼育動物
伊勢原市	制限なし	小～大型犬、猫、哺乳小動物
海老名市	制限なし	小～大型犬、猫、哺乳小動物 人に危害を与える動物、付帯設備を要する動物は不可
小田原市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、哺乳小動物
鎌倉市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類
川崎市	制限なし	小～大型犬、猫、他は要相談
相模原市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物 特定動物は不可
座間市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、両生類、昆虫類、哺乳小動物
逗子市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物 大型犬等ケージに入らない場合は個別対応
茅ヶ崎市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物
秦野市	制限なし	小～大型犬、猫、哺乳小動物 毒性や人に危害を与える動物は不可
平塚市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、哺乳小動物
藤沢市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物 人に危害を与える動物は不可
三浦市	制限なし	明確な取り決めはない
南足柄市	制限なし	明確な取り決めはない
大和市	制限なし	明確な取り決めはない
横須賀市	制限なし	小～大型犬、猫、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、猛禽類、昆虫類、哺乳小動物
横浜市	各避難所の収容数による	小～大型犬、猫、鳥類、哺乳小動物 付帯設備を要する動物は不可

表 4-6 神奈川県 19 市 ホームページ

厚木市	https://www.city.atsugi.kanagawa.jp/index.html
綾瀬市	https://www.city.ayase.kanagawa.jp/
伊勢原市	https://www.city.isehara.kanagawa.jp/
海老名市	https://www.city.ebina.kanagawa.jp/
小田原市	https://www.city.odawara.kanagawa.jp/
鎌倉市	https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/
川崎市	https://www.city.kawasaki.jp/
相模原市	https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/
座間市	https://www.city.zama.kanagawa.jp/www/toppage/000000000000/APM03000.html
逗子市	https://www.city.zushi.kanagawa.jp/
茅ヶ崎市	https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/
秦野市	https://www.city.hadano.kanagawa.jp/www/index.html
平塚市	https://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/index.html
藤沢市	https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/
三浦市	https://www.city.miura.kanagawa.jp/index.html
南足柄市	https://www.city.minamiashigara.kanagawa.jp/
大和市	https://www.city.yamato.lg.jp/index.html
横須賀市	https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/
横浜市	https://www.city.yokohama.lg.jp/

蓄の必要性を認識しつつも実際に行動に移せる人ばかりではないということや、避難所の備蓄を頼らざるをえない現状にあることが明らかになった。なお、東京23区でも神奈川19市でもすべての自治体では一部あるいはすべての避難所で同行避難を受け入れていた。ところが、場所不足からフードやケージなどペット避難に必要な品を備蓄する自治体は23区中6区、19市中5市であった。飼育ルールを設ける自治体は19区、17市と多く、ペットの受け入れ頭数には「制限なし」とする自治体は20区、17市に上った。

すなわち、飼い主側では備蓄不足になりがちなアイテムであっても、自治体ごとに差があるうえ、十分に備蓄されているわけではないことが分かった。つまり、飼い主側と自治体側とで備蓄準備の比率がミスマッチを起していることが明らかで、災害時には高い確率で必須アイテムが不足しかねない。例えば、東京都港区では「トイレシート」の備蓄はあるが、残りの22区では準備されていない。神奈川県19市では「トイレシート」を備蓄している市は皆無であった。これに対し、動物看護学部生対象の備蓄品に関する調査の結果によると、「トイレシート」を備蓄している学生は2割ほどしかいなかった。他にも、各飼い主が備えている状況と、各自治体の備蓄状況を把握した結果を合わせると、中でも特に「フード」や「猫砂」については飼い主も自治体も備蓄準備が明らかに不足していることが分かった。

また、東京都23区と神奈川県19市の各自治体担当者への調査票調査の結果、エリアによって受け入れ状況やペットが滞在可能なエリアが異なり、受け入れ可能頭数、受け入れ可能動物種にも違いがあることがわかった。「犬や猫」、「哺乳小動物」についてはほぼすべての、「鳥類」は大半の自治体で受け入れる避難所があるとの回答であったが、いわゆるエキゾチックアニマルの中でも「爬虫類」、「両生類」、「猛禽類」、「魚類」、「昆虫類」まで受け入れ可能な自治体は極めて少なかった。

6 まとめ：必要な対応

第2章、第3章、第4章の結果や第5章における考察を受けて、現在飼い主や自治体に必要とされる災害への備えについてまとめると以下ようになる。

第1に、災害時には、被災自治体の行政機能の麻痺や通信断絶等により支援が遅れる場合を想定し、

「ペットフード」や「トイレ用品」の備蓄は最低限飼い主自身で用意すべきと考える。空腹状態にあるペットの要求吠えや無駄吠えも「フード」の備蓄次第では軽減される。このことから、飼い主自身ではもちろんのこと、各避難所においても、「フード」の備蓄量を増やしておくことにより、避難所での要らぬトラブル発生も抑えられることが考えられる。

第2に、その他のアイテムについても、避難所による備蓄量では必要量が賄いきれないおそれがあるので極力自分で用意しておくべきである。ペットは「屋外」で過ごす明記する自治体が14区9市あるため、室内飼いのペットのためには「クレート」の準備も必要になるだろう。

第3に、首都直下地震が発生した場合、東京都や神奈川県は強く地震の影響を受けることになるが、人口密度が高く、長距離通学・通勤者も多いエリアであるため、自宅に戻れない期間が長期化することも考えられる。Wi-Fiも途切れるため、留守番中のペットの状況をペットカメラなどで把握することも難しくなるだろう。帰宅できない間のペットの食餌や給水をどうするか、逃げ出して野良化した際にはどのように捕獲できるのか、自分が動けなくなったときに誰に頼れるのか、託せるのかなどについて検討し、地元で頼れるネットワークを構築する必要も出てくるだろう。

第4に、「犬猫以外の動物種」については避難所には受け入れていない自治体も少なからずあった。東日本大震災の折に置き去りにせざるを得なかった家畜が野良化し、餓死したことが問題視されたことは記憶に新しい。少なくとも現状では、ペットとして飼われていても「犬猫以外の哺乳類」、「鳥類」は複数の、「爬虫類」、「両生類」、「猛禽類」、「魚類」、「昆虫類」については多くの避難所に持ち込まず、同行避難がかなわぬエリアが多かった。しかし、これらの動物種にも犬猫や人間同様に苦痛や恐怖を感じる個体もあるし、すべての動物種は置き去りにすれば餓死したり野生化して生態系を破壊しかねず、ヒトを含む他の動物種に危害を及ぼすこともありうる。

では、実際に犬猫以外のいわゆるエキゾチックアニマルの災害対策はどうすればよいだろうか。これについて、アニマルライツセンターは「同行避難をおこなうこと、自分には同行避難ができないと考えられる場合は飼育しないこと、同行避難ができない動物、危険

な動物を飼育しないこと、衰弱死させることは法令違反であることを認識すること、外来種の飼育は行わないこと（特定外来生物は法律で禁止されている）」を提案する〔アニマルライツセンター, 2017〕。昨今、爬虫類や両生類などは、専門店からの購入に限られず、各地のイベント会場で行われる移動展示販売に行けば事前知識が無くても気楽に入手可能となっている。レア種が好まれる傾向もあることから、密輸入された個体が販売されることも少なくない。これらの動物が災害時に置き去りにされたら様々な影響があるだろう。

しかし、川越も指摘するように、災害時の行政の支援（公助）は人間に対する救護が基本で、特に大規模災害の初期にはペットに対する公的支援はほぼ期待できない。飼い主による「自助」が基本であり、しつけを含む「平時の備え」や、災害時に飼い主が行うべき行動が重要である〔川越, 2019〕。また、動物における防災では「自助」とは飼い主自身の備え、「共助」とは飼い主どうし、近隣住民の協力、「公助」は行政や獣医師会などの支援を意味する〔水越, 2019〕。水越によれば、「共助」としていざというときお互いにペットを預け合えるような仲間を作っておくことも備えになるという。犬猫であってもこのような状況であることから、避難所に同行出来ない動物種を飼育している場合にはなおさら、この「共助」が特に重要になるのではないだろうか。エキゾチックアニマルを診られる獣医師も少ないことから、万一の場合には避難所に入れないだけでなく「公助」にもさほど頼れないおそれがある。そのことを前提に、自分が責任をもって終生飼養できる範囲の頭数や動物種の飼育を行うよう心掛けるなど、普段から自助努力による備えを行う必要があるだろう。

7 謝辞

本研究で実施した調査にご協力頂いた各自治体および調査対象者の皆様にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

参考文献

- アニマルライツセンター, 2017. 犬猫以外の哺乳類・鳥類・爬虫類・両性類等のペットの災害対策. <https://arcj.org/issues/partner-animals/partner1174/> (2024 年 1 月 21 日閲覧)
- 弁護士ドットコムニュース, 2024. 「羽田事故でペット犠牲、動物が「荷物と同じ」扱いにされる現状を見直す時期に ペット法学からの視点」2024 年 1 月 13 日 (土) 9:52 配信 <https://news.yahoo.co.jp/articles/5945519dd7a3ad7e0d21c664e156621e225e2233> (2024 年 2 月 5 日閲覧)
- 平井潤子, 2017. 「ペットと暮らす・避難所で暮らす」『すまいろん』101, 30-32.
- 花木優生, 2023. 「自然災害時の同行避難の現状」ヤマザキ動物看護大学令和 4 年度卒業論文.
- 兵庫県南部地震動物救援本部活動の記録編集委員会, 1996. 『大地震の被災動物を救うために：兵庫県南部地震動物救援本部活動の記録』 https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/eqb/0100055426/?lang=0&mode=0&opkey=R166390325277750&idx=1&chk_schema=10000&codeno=&fc_val=&chk_st=0&check=000 (2024 年 2 月 5 日閲覧)
- 梶原はづき, 2019. 『災害とコンパニオンアニマルの社会学：批判的実在論と Human-Animal Studies で読み解く東日本大震災』第三書館
- 環境省, 2018. 「災害、あなたとペットは大丈夫？人とペットの災害対策ガイドライン＜一般飼い主編＞」平成 30 年 10 月 3 日 (2024 年 1 月 21 日閲覧) https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3009a.html
- 環境省, 2002, 2022. 「家庭動物等の飼養および保管に関する基準」(平成 14 年環境省告示第 37 号最終告示令和 4 年環境省告示第 54 号) (2024 年 1 月 21 日閲覧) https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/laws/nt_r02_21_1.pdf
- 加藤謙介, 2013. 「「災害時におけるペット救援」に関する予備的考察：先行研究の概観及び新聞記事の量的分析より」『九州保健福祉大学研究紀要』14, 1-11.
- 加藤健介, 2017. 「平成 28 年熊本地震における「ペット同行避難」に関する予備的考察——益城町総合運動公園避難所の事例より——」『九州保健福祉大学紀要』18, 33-44.
- 加藤健介, 2022. 「日本における「人とペットの災害対策」をめぐる課題と展望—「包摂」「連携」「対話」「情報」の観点から—」『自然災害科学』41(3), 245-300.
- 川越国洋, 2020. 「人とペットの災害対策について」『ペット栄養学会誌』23(1) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpan/23/1/23_9/_pdf/-char/ja (2024 年 1 月 21 日閲覧)
- 水越美奈, 2019. 「ペットを守る、ペットと生きる防災」『ペット栄養学会誌』22(2) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpan/22/2/22_109/_pdf/-char/ja (2024 年 1 月 21 日閲覧)
- 本村光江, 2022. 「震災時のペット同行避難に関する

- 犬猫飼い主へのアンケート調査」『大阪経大論集』73(4), 137-150.
- 内閣府, 2008. 自然災害の「犠牲者ゼロ」を目指すための総合プラン 平成 20 年 4 月 <https://www.bousai.go.jp/jishin/taishinka/pdf/sougou.pdf> (2024 年 1 月 21 日閲覧)
- 新島典子, 2001. 「喪失体験（ペットロス）はなぜこんなにつらいのかーリアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化についてー」『現代社会理論研究』11, 225-238.
- 新島典子, 2004. 「喪失（Loss）からの「回復」にみる喪失対象の代替可能性」『ソシオロギス』28, 48-62.
- スターフライヤー, 2024. 「よくある質問」Fly with pet 搭乗手続きについて <https://www.starflyer.jp/checkin/pet/flywithpet/> (2024 年 2 月 5 日閲覧)
- 徳田剛, 2018. 「新潟における災害時のペット同行避難者への対応についての考察」『哲学論集』64, 1-17.
- 土屋敏之, 2018. 「災害時の避難 ペットはどうする？」（くらし☆解説）| みみより！くらし解説 | 解説アーカイブス | NHK 解説委員室, 2018 年 8 月 3 日 <https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/302866.html> (2024 年 1 月 21 日閲覧)
- 山田昌弘, 2004. 『家族ペット：やすらぐ相手はあなただけ』サンマーク

The Possibility of Evacuating with Increasingly Diverse Pet Animals —A Survey on the Acceptance of Animal Breeds in Evacuation Centres in the 23 Wards of Tokyo and 19 Cities in Kanagawa Prefecture

NIIJIMA Noriko¹⁾, HANAKI Yu²⁾

Abstract

In this study, firstly a questionnaire survey on awareness of evacuation with pets in the event of a natural disaster was conducted among university students and the results presented. Secondly, municipal offices in the 23 wards of Tokyo and 19 cities in Kanagawa Prefecture were asked to respond to the questionnaire survey on evacuation with pets, and responses were compiled on current preparedness and issues regarding disasters in each municipality (as of November 2022 to January 2023, and not reflecting any changes and revisions since then).

The results revealed that the proportion of items that pet owners tend to under-stockpile does not always match the proportion of stockpile preparedness on the part of local authorities. Also there were differences in stockpiled varieties among municipalities. For example, in Minato Ward, Tokyo, toilet sheets for pet animals are stockpiled, but not prepared in the remaining 22 wards. On the other hand, when compared to the results of a survey of stockpiles among veterinary nursing students, only about 20% of students stockpiled toilet sheets. In addition, none of the 19 cities in Kanagawa Prefecture stockpiled toilet sheets. Both pet owners and municipalities were underprepared for stockpiling, particularly for food and cat litter.

The results also revealed that the acceptance situation and the places where pets could stay differed depending on the area, as well as the number of animals that could be accepted and the species of animals that would be allowed. Almost all municipalities indicated that they had shelters that accepted dogs, cats, small mammals and birds, but only few municipalities were able to accept so-called exotic animals such as reptiles, amphibians, birds of prey, fish or insects.

Key words: accompanying evacuation with companion animals, animal species, pets, exotic animals

¹⁾ Yamazaki University of Animal Health Technology, Department of Animal Health Technology

²⁾ Self-employed